



「鯉のぼり立つるを見あげ若き妻 幼子抱きほほ笑みてをり」

(文芸誌「曠野」昭和6年6月号)

どの時代でも我が子の健全な成長を願う親心は変わりません。越谷市の不動橋付近では、大相模地区コミュニティ推進協議会主催で、市内保育所(園)、幼稚園、地区内小学校の子どもたちが作った大型手描きこいのぼりが先日まで揚げられていました。この子たちに、いい未来を残したいものです。



大型手描きこいのぼり(5月2日撮影)

越谷発

変動期の文芸誌

大正から昭和にかけて、市域には句会のグループが作られていました。千草会(蒲生村)、麗吟社(出羽村)、荻吸社(荻島村)、鳩声会(大相模村)、越ヶ谷句会(越ヶ谷町)などです。このような下地もあって、文芸誌を編集するグループも現れました。今年で創業94年になる市内の書店が発行所でした。「古民家だより」今号と次号でそのことを特集します。登場する人物の敬称を略させていただきます。また原文は旧仮名遣いですが、現代のものにしました。

1 文芸誌の概要

この書店で編集・発行された文芸誌は、おおよそ次のようなものでした。

文芸誌名	創刊年	終刊年	内容等
めいし 明詩	大正13年(1924)	昭和3、4年頃? 現在、市に保管されているのは4冊。	編輯(集)人:中村善太郎、発行人:中村眞一。文学評論、俳句、短歌、詩などの純文学。全国に同人500人。大正14年8月号には英文学者で詩人の馬場孤蝶が評論文を載せている。
新時代	昭和4年(1929)	不明。1年で終刊になった?個人蔵の創刊号がある。	編輯(集)人:中村眞一、発行人:中村善太郎。映画情報やゴシップを中心とした大衆誌。当時の文化傾向の一つだったより大衆的な雑誌。刹那的な内容も含まれる。
こうや 曠野	昭和5年(1930)	不明。市に保管されているのは昭和8年11月号迄。「明詩」から通巻77号迄の分。	「明詩」の再刊として発行。編集は中村善太郎。7号迄は4~8ページの簡易な装丁。この頃の同人は市域の人々。その後は20~40ページの冊子となり、純文学の評論と短歌作品。毎月歌会が行われ、時には清水公園などに吟行も行った。同人は全国に広がり、当時日本の支配下にあった朝鮮からも投稿があった。

2 善太郎夫婦

「明詩」や「曠野」を主宰した中村善太郎という人は1920年代に東洋大学で学んだ人です。21歳から家業の木綿商店で働く傍ら、文芸誌の編集をするようになりました。(以下※は善太郎作)『編輯(集)後記』に次の記述があります。

★今月号遅れた原因は私の副業たる繭買入時期なる為でした。(「明詩」大正15年8月号)

善太郎が短歌を作る際に心がけていたのは次の事柄です。

★我々が日々つねに言いなれて用いられている言葉をもって表してゆく。熱がない心をもって歌ったものは、いくらよく整ってあるといえども、皆力が希薄である。(「曠野」昭和6年7月号)



久伊豆神社での歌会記念写真(「曠野」昭和6年(1931年)6月号)
この年3月に善太郎は結婚(25歳)

善太郎は昭和6年(1931年)3月に結婚しました。その頃の夫妻の歌を紹介します。

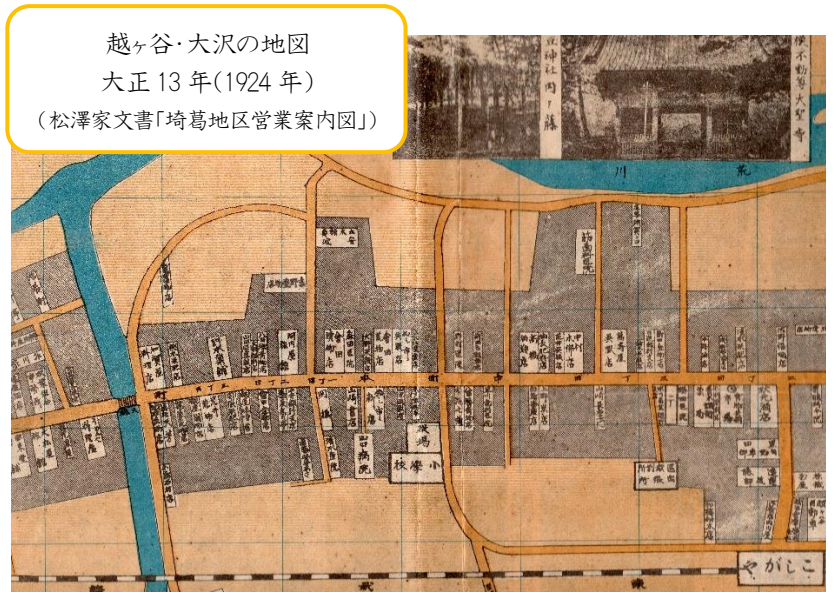
- ★吾は今 なに考えて居たりしよ 心のうちに妻よびにけり (※) (「曠野」昭和6年4月号)
- ★歌好む君とは知らで嫁ぎたり いかにか歌よみ吾がなぐさめん (妻・春子) (「曠野」昭和6年6月号)

このほかにも夫妻が詠んだものが多くあり、互いを大切に思い合う心や時には軽い愚痴のようなものも歌にして、信頼感を深めていった様子が表れています。

3 当時の風景

これらの文芸誌には毎回多くの同人の作品が掲載されています。その中には越ヶ谷の風景を詠んだものもあります。

- ★天嶽寺の墓地の静けさかさこそと 落ち葉をふみて行くものあり (「曠野」昭和5年10月)
- ★雨はれて 濁水の流るる元荒川の 蓮の花は黒くうつれる ※ (「曠野」昭和5年10月)
- ★雨の夜は藤棚ぬれてひややけし 足場気をつけ池際立つ ※ (「曠野」昭和7年6月号)
- ★火事と聞き 声もろ共にかげゆけば 煙あかれり越ヶ谷女学校の焼く (「曠野」昭和6年6月号)



市域の風景だけでなく、同人たちが旅行先や帰省して詠んだものなど多数あります。景色の美しさ、季節感など、その場所にいた人の瑞々しい感性やその時の心情が伝わってきます。

- ★黒土のしめりし中に露おびて 若葉の光る初夏の朝 (「明詩」大正14年8月号)
- ★潮引きて入江の砂にそちこちと 小蟹動ける春の午すぎ (「明詩」大正15年5月号)

4 恋

同人の年齢層ははっきりとはしませんが、「明詩」創刊時の善太郎は18歳、「曠野」創刊時は24歳でした。「明詩」(大正15年8月号)に評論文を寄せた馬場孤蝶はその時56歳。善太郎をはじめとして同人たちは比較的若かったようです。中には女学校を卒業したばかりの人もいました。したがって恋愛に関する作品も少なくありません。

- ★美しき瞳と会いておののきつ そらせし時の胸のとどろき (「明詩」大正15年4月号)
- ★夏の日のうたた寝の夢のはかなさに 我が恋は以て心寂しも (「曠野」昭和6年6月号)
- ★恋人とランデブウする日の朝はおちつかず居て 心ときめく (「曠野」昭和7年5月号)

5 家族

人が生まれて最初に出会う社会が家族です。温かさと共に家族故の諍いもあります。そんな様子を描いた歌もまた数多く詠まれました。

- ★叱られて淋しく寝たる弟の枕辺にそと蜜柑置く姉 (「明詩」大正14年8月号)
- ★しみじみと肉親の愛に包まれて わが心には何ものものなし (「曠野」昭和5年9月号)
- ★吾がおもい 高ぶるままに子を打ちて 寂しき涙かみしめにけり (「曠野」昭和6年1月号)
- ★ひねもすの田植えに疲れて母上は 夕餉食わずに床につきたり (「曠野」昭和6年8月号)
- ★石板に消さず持て来て子の見せり 「マ」の字につきし赤き丸一つ (「曠野」昭和7年6月号)
- ★お互いに不平を言わぬ誓いなど 妻と語る冬の夜かな (「曠野」昭和6年3月号)

石板とは

石の板に木枠をつけたノート大のもので、ロウ石などで文字等を書いた用具。明治～昭和前半に小学校低学年の文字練習や計算に用いた。

微笑ましさと切なさを感じます。けれども当時(大正末期～昭和初期)は変動と不安定の時代でした。そういう背景を考えると、この感情はより貴重なものに見えてきます。次号ではこの点をさらに観ていこうと思います。